

## ヘッセル先生の手紙

鈴木 進 訳注

東洋伝道への関心が高まっていた十九世紀半ばの欧米のプロテスタント諸教会は、日本に宣教師を送れる日を待ち望んでいた。そのような時、日米通商修好条約の締結（一八五八年）はそれらの教会に日本伝道の望みをもたらした。条約の第八条に「日本にある亜米利加人、自ら其国の宗教を念じ、礼拝堂を居留地の間に置くも障りなし」の一ヶ条を拠り所として、各教派は宣教師を派遣し、来るべき日に備えを始めた。むろんキリシタン禁制下での準備であるから聖書の翻訳、医療、福祉そして英語教育などの間接的手段によらざるを得なかったのだが。

プロテスタント宣教師として最初の来日は条約締結の翌年春、リギンズ、ウィリアムズ、十月にヘボン夫妻、続いてブラウン夫妻、シモンズ夫妻、ヴァベック夫妻、六十年代にはゴープル夫妻、バラ・タムソン：この表はもつと長く続き、彼らの働きについては日本プロテスタント教会史が記す通りである。

しかしながらその働きはほとんどが、たとえ夫婦で来日した場合でも、夫の名前のみが記され、妻の方は宣教師であっても、結婚しているがゆえにあまり公には知られず、また知られることを望まず、夫の伝道を助けることを喜び、栄光をすべて神に帰した婦人たちが

あったのであろう。

時代が少し下ると、もうひとつのタイプの婦人宣教師たちが来日するようになった。それは一八六九年のミス・キダーに始まりクロスビー、スクーンメーカーなど「うら若き身を神にささげ、遠く故郷を離れて異教徒の間に伝道しようという純真な人達」で、さらに「日本の女子の教育に使命を覚え活動を始めた。日本人がまだ女子教育に注目しないうちに、これこそわが使命なりと献身していった」タイプ『日本キリスト教教育史』（pp.25-26）の中の井上義巳教授の発言）の独身婦人宣教師たちであった。

明治初期プロテスタント教会史の中で、開港地から遠く離れた北陸地方伝道にあつて前述の二つのタイプの婦人宣教師をそれぞれあげるならば、前者の典型をウイン夫人とし後者にメリー・K・ヘッサーとするのあまり異論はないであろう。

ウイン夫人については、ここではふれないことにし、ヘッサーの場合を考えると彼女の書いた手紙からまさに井上発言がそのままあてはまることがわかる。従来ヘッサーについての資料はごくわずしか知られてなかったが、筆者はメリー・K・ヘッサーがニューヨークの長老派ミッシオン本部に書き送った十五通の手紙の写しを手

に入れることが出来た。ヘッサーのたてた金沢女学校(現北陸学院)が創立一〇〇年を迎えた今年(一九八五年)それらの手紙を日本語に訳すことにより、ヘッサーの生涯と学院建学の精神とを創設者自身の文章から読みとり、さらに日本の女子教育史におけるキリスト教主義女学校の置かれた位置を考える一資料に供したいと思う。

手紙はフライデルフィアの Historical Society of The Presbyterian Church in the U.S.A. が保管しているものを高谷道男氏、秋山繁雄氏、斎藤育子氏、バージニア・ディター氏の方々を通してマイクロフィルム・コピーでお譲りいただいた。記して謝意を表したい。

日本語訳にあたって、人名の表記は表題の「ヘッセル」を除き、それ以外ではできる限り原音に近づけるように努めた。

## 注

- (1) メリー・ヘッサー (Mary K. Hesser) は一八五三年(嘉永六)七月二十七日ペンシルベニア州エリー市のドイツ系アメリカ人の家庭に生れた。長じてオハイオ州、ウエスタン・フィーメル・セミナリーに学ぶ。外国宣教に志し、八十年来日、大阪に赴く。翌年金沢の T・ウインのもとに滞在し、女子教育の必要を知り、同市に女学校設立の願いをもつ。八十四年には里見鍼と共に学校を開き、翌八十五年県令の認可を得て金沢女学校を創設。九十一年、病氣治療のため帰国。一時は健康を回復し日本に戻るが、九十四年には再び病氣治療を受けるため帰米、手術のいかもなく九月一日、ロサンゼルス病院にて召天。墓はロサンゼルスローズデール墓地にあり、後に、卒業生河邊鈴野はその墓を訪ねたという。(『北陸学院五十年史』)

一八八七年(明治二〇年)

一月十六日

金沢、金沢女学校にて

ワイコフ教授あて<sup>(1)</sup>

数週間前にポーター師がお渡し下さった手紙によって、あなたがわたくしたちの事業について報告を求めていらっしやることを知りました。すぐにするつもりでございましたものの、結局出来ず終い、今でも間に合えばと願っております。

わたくしたちの学校は六月の学年末の時点で生徒数五十を数えました。<sup>(2)</sup> そのうち十五名がクリスチャン、九名は四月に受洗いたしました。教室が足りないのと、それに英語のクラスを新たに始めるだけの時間が無かったものですから、二十名以上の方の入学をお断わりしました。

九月に新学期が始まった時に授業料を値上げしたせいでわずかなり生徒が減りました。<sup>(3)</sup>

日曜学校を開いております、それにはほとんど全員が出席し多くの生徒が妹を連れてまいります。

伝道クラブは会員三十二名で構成され、懸命に手芸品作りに励んでおります。そこからあがる収益金を外国伝道に献げようというのです。

聖書を毎日テキストとして用いておりますが、生徒の中には聖書の研究に深い興味を示す者もおります。時間があれば興味深いものと多くのことを書けましたものを。

メリー・K・ヘッサー

## 注

- (1) ワイコフ (Martin N. Wyckoff, 1850-1911) "The Mikado's

## ヘッセル先生の手紙

Empire. の著者グリフィスの後任として福井藩校で英学を教えた。後に明治学院教授、物理、化学、英文学を担当。

(2) 『北陸学院八十年史』によれば、本科生四十七名となっている。

(3) 女学校の経営はマウント・ホリヨーク方式による、つまり慈善学校ではなくて、生徒から授業料や寮費をとる考え方で始められた。

一八八八年（明治二十一年）

一月十一日

金沢にて

ミツチエル博士あて

過ぎ去った一年を顧みて、天のお父様に心から感謝をおささげいたします。わたくしたちにとりましてまことに恵みに満ちた年でありました。またわたくしたちの手の業も栄えさせていただきました。生徒数は今年授業料を値上げしましたものですから多少減りましたが<sup>(1)</sup>他にも入学を志願している者もありますのでやがてまた定員いっぱいになるでしょう。

教室で教えることが去年の秋から大幅に増えました。これは授業が進んだのだから仕方がないのです。そのために学校の仕事がいっそう忙しくなりました。

わたくしどもの学校にもう一人の婦人教師を派遣して欲しいとの要請が金沢ミッションから出され、もうお手元に届いていることと思います。夏にネイラー夫人が<sup>(2)</sup>お便りした時には、わたくしたちの事業は拡張することも援助を求めることも当面はありません、と書いたものですから、それできつとお驚きになったでしょう。実際そのどちらもするつもりはありませんでした。ところがわたくしたちは、有能な日本人の婦人伝道師が大変必要とされているという点に

注目するようになったのです。富山と大聖寺の伝道所にそのような婦人がどうしても要るのです。昨年六月、学校が休みになってから日本人の教師と生徒一人とを連れて富山に行つてまいりました。一週間ほど滞在してみても仕事に大いに期待が持てるのがわかったのですが、わたくしは帰宅して仕事を離れ休養しなくてはならなかったのです。前年度の疲れがひどく残つていて夏の暑さの中で続けて働けませんでした。日本人の教師と生徒はそのままひと夏富山に留まりよい奉仕をしましたが九月に学校が再開されたので金沢に戻つて来なくてはなりません。わたくしは誰れかそこへ行つて仕事をしてくださる人がいないか夏中さがしたのですが、金沢とこの近辺にはそういう働きの出来る人は見つかりませんでした。十一月になつてやつと東京出身の婦人伝道師をさがし得て、その人は現在高田での働きが大きくなりおもしろみも出てきたところですが、富山に来て夏までは留まりましょう、と言つてくれたのです。東京などから伝道の助手を連れてこようとすれば、地元でそういう人を訓練し雇うよりもはるかに経費がかかります。わたくしたちが切実に必要としているのは、地元の婦人を訓練し伝道師として育てることなのです。これこそわがクリスチャンスクールの目的とするところですが、本校のクリスチャンの生徒たちはまだ年令も若く、その保護者である親たちもほとんどがクリスチャンではなく、ただ娘たちに英語を習わせたいと思つて寄越しているのです。ですから生徒たちがそのような働きが出来るようになるにはしばらく時間がかかるでしょう。わたくしたちは今すぐ伝道の助手が必要なのです。

学校の中でもまた外でも、もつとじかに聖書そのものを教え、婦人と年長の生徒たちから成る伝道師養成クラスをもうけ、時には各地の伝道所を訪ねさせることもある、家にあつては生徒たちの監督

をする、そういうことをわたくしはずっと望んでまいりました。しかしこれをするには教室での授業を免除してもらわなければならぬ、そのための勉強の時間も必要になります。予定している婦人が着任し授業と日本語の勉強を共にしてくれるなら、わたくしも勉強と休息の時間がとれ、今、切実に必要とされている仕事に着手できる機会にもめぐまれるでしょう。もうすぐ年長の生徒が三名と婦人が数名、いずれも喜んで特別訓練を受けこの仕事に献身するつもりであります。

クリスマスの後休暇が二週間ありまして、初めの週には日本人の友人やわたくしたちの学校の後援者たちをわが家に呼び、お持て成しました。次の週にはそれらの方々を訪ねて過ごしました。四十軒も訪問し大変な歓迎を受け、ぜひもう一度来るようにと繰り返し言われました。全部が全部キリストにある真理に耳を貸そうという人だけではありませんでしたが、それでもわたくしたちがその問題に立ち入れるように多くの方が心の扉を開いて下さり、どうぞもう一度来て下さい、そしてキリスト教のお話をして下さい、という人もあれば、命のパンを求めてわが家を訪れる人もおります。このようにわたしたちの手も心も一杯に満ち溢れています。しかし今負っている負担が軽減されない限り、これ以上の仕事は引受けられません。

この問題について慎重に、また祈りをもって考えたい、その必要性をお知らせするのがわたくしたちの務めであると考え、すべては主のなされる働きであり、働きの人が無いのをそのままにされることのない主にお委ねしようと思いました。

生徒たちが伝道クラブを組織しました。子供たちが家で用いているような桶や樽ではなくて、本校の生徒たちは瓢箪の入れ物を備え

その中にお金を集めています。クリスマスの日後に生徒と母親たちのためにお楽しみ会を催し、その席で瓢箪をこわして中味を数えてみると三ドル三十四セントになっておりました。この他に、毎週土曜日に一緒に集まって手芸品作りをしてきましたが、それをお楽しみ会で即売し売上げが三ドルを越えましたのでグループの会計係が郵便為替であなた宛に送金したいと言っております。日本のお金で約六ドルですからアメリカ金に交換すると約五ドルになります。これは僅かな金額にすぎませんが、生徒たちのお小遣はあまり多くないのでですから、捧げる生徒たちの側に見ればまことに尊い捧物でした。彼女たちはその僅かなお金をも喜んで送金しようと楽しみにしているのです。

この大変興味深い事業について申し上げたいことはもっとございませぬ。わたくしたちに与えられる機会には数限りなくたくさんあるのですが、わたくしたちの能力には限界があり、その限界を越えればきつと健康の法則にそむいてつき進むことになるでしょう。ネイラー夫人もわたくしもいつときも惜しまずそれにあたりたいと思っておりますが、時として思いがけないことが起るものです。そうするとわたくしたちに手を貸してくれるだけの時間のある者は他に誰もいないのですから、普段の倍の負担を強いられなくてはなりません。その場合、二人のうちどちらかが病気にでもなれば、そういうことが時々あるものですが、もう一人がさらに看病もしなければならなくなるのです。

伝道の仕事を愛し今まで誠実にご援助下さったあなたのことですから、わたくしたちの窮状を理解し可能な限り早急に援助の手をのべて下さるものと存じます。ネイラー夫人も心からよろしくと申しております。

メリー・K・ヘッサー

ヘッセル先生の手紙

注

(1) 卒業生の思い出に「それまで月額三十銭の授業料であったのを五十銭に値上した。そのため六十人くらい居た生徒が二十五人ほどに減ったので、もとの三十銭にもどした。なお寄宿舎費は一ヶ月一円八十銭であった」とある。

(2) Laura Naylor (Thomson) 一八八六年七月ヘッサー女史が横浜まで迎えに行き八月に一緒に金沢に来る。金沢女学校教師として病弱のヘッサー女史を助け一八九九年三月まで勤める。「丈は六尺に近く」(阿閉政太郎談)。また金沢で初めて自転車に乗った女性ともいわれる。『北陸学院五十年史』に Porto Rico から便りを寄せている。

一八八八年一月三十一日

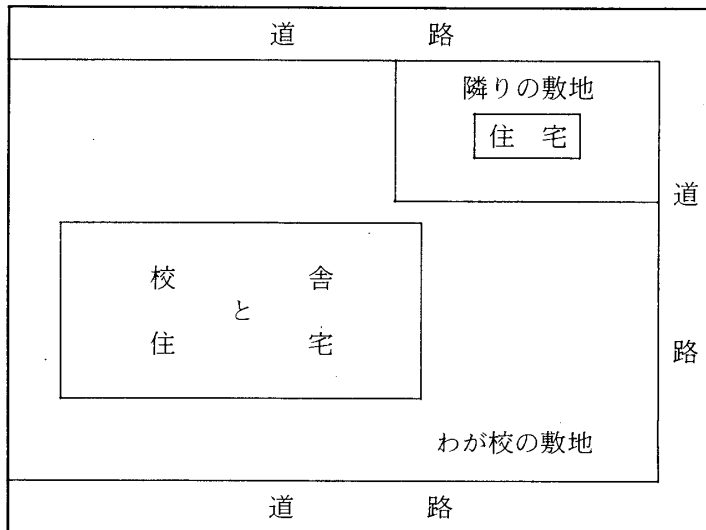
(ヘイズ氏からの手紙の抜書き、宛名なし)

ミス・ヘッサーは西日本沿岸では他の誰よりも上手に言葉が話せます<sup>(1)</sup>。ミス・ヘッサーのためには今彼女に期待されている大きな働きを自由にさせてやるべきだと私は思うのです。また彼女はその仕事に適任です。婦人たちは彼女の言うことを喜んで聞き、富山や七尾、大聖寺、小松などのような町で日本人伝道者の働きを助けることによって、あるいは伝道者のいない町の婦人たちの間に伝道を開始することによって大きな成果を生み出すことでしょう。そこで彼女にこの金沢の地で婦人伝道師のクラスを教えさせるべきだし、彼女にはそれが出来るのです。ただし彼女には学校の職務があつてこの計画を果たすことが出来ません。学校での働きもまた重要です。教師を一人派遣してくれるようにと本部に要請をしてきました。彼女にとって代わる有能な婦人でなければなりません、ただちにその責任

を持つものではない。というのはミス・ヘッサーはそのまま学校の長として残っておられるのですから。その人に英語と唱歌などを教えてもらえば、ヘッサーとしてはただちに新計画にとりかかれるのです。

(同日のミス・ヘッサーの手紙の抜書き)

わたくしたちの敷地のすぐ隣りの小さな地面とそこに建っている日本家屋をぜひ購入したいということは申上げてありました。必要な土地と建物はバイブル・トレーニングのために婦人と生徒たちの住宅兼ホームにするのです。場所は左の図のような位置にあります。土地と建物両方が約三〇〇ドルで購入できると思います。



注

(1) 「室を異にして師の日本語を聞くと、其の音声と云ひ抑揚と云ひア  
クセントと云ひ、どうしても外国人の日本語とは思われなかった」

(卒業生の思い出)

一八八八年一月三十一日

(金沢のミス・ヘッサーの手紙からの抜書き)

わたくしたちの地所に隣接して小さな土地がありその敷地には小  
さな建物が建っていて、わたくしたちとしては出来れば購入したい  
と思っております。わたくしたちは教室を必要としているのです。  
わたくしはその建物でもって婦人のための小さな神学校を始めよう  
と計画しているのです。学校というよりはむしろ教室といった方が  
よいでしょうが、そこでもってクリスチャンの婦人たちを訓練し婦  
人伝道師を養成するつもりです。そのような仕事に当たる日本人の  
クリスチャン婦人が必要とされているのです。この地方では特にそ  
うです。それも今すぐに。誰かふさわしい人を東京から呼ぶのは大  
変難しく、またお金もかかります。そこで今三〇〇ドルありさえす  
ればただちにその土地を買えるのです。<sup>(1)</sup> ミッションにはそのお金を  
請求したくありませんので結論としてこの問題を自分たちの友人に  
話してみても、もしそのうちの誰かが少しでも援助してあげようと思  
って下さるならば、わたくしたちとしてはその方々に心からお礼申  
上げようということになりました。

どうぞ伝道局を通さずに送金して下さい。それですと手間取るこ  
とになるでしょうから。

注

(1) 来日をしていたヘッサーの恩師ヘレン・ピーボディ女史も本部にこ  
の件につき手紙を書いて口添えをしている。

一八八八年二月六日

(宛名なし) 金沢にて

この手紙は二年間英語を学んだ日本人教師が書いたものです。最  
初日本語で書いたのをわたくしが手伝って英語に訳しました。その  
写しがこれです。

手紙を書いてからわたくしはお金はエリンウッド博士宛に送金す  
べきだったと気づきました。わたくしの不注意でしたが、あまり違  
いはないでしょう。お金は東京に送って、そこから再び送金しても  
らいますのでお手元に為替が届くのは多少遅れるでしょう。このよ  
うに送金できた僅かなお金でも神の祝福を受け何十倍にもなるよう  
にと祈るものです。愛する人々のためにわたくしたちが働いている  
かと思うと関心も深まり、勇気も湧いてきます。しかし非キリスト  
教的要素がとばりのように重々しく人々の上に、特に中央から遠ざ  
かったこの地方の上を覆ってまいります。人々にはわたくしたちの  
援助と絶えざる祈りが必要であり、わけても聖霊による生ける力  
が必要です。わたくしたちと一緒に、日本のために祈ってください。  
特に金沢のため、罪と迷信に打ちひしがれているこの地方の人々の  
ためにお祈りください。ネイラー夫人からもあなたによるしくと申  
しております。

メリー・K・ヘッサー

## ヘッセル先生の手紙

一八九〇年(明治二十三年)

四月十二日

金沢にて

ミツチエル博士あて

婦人宣教師たちに、自分たちの仕事の様子や必要としているもの、励みとなる事柄、失望することなどを主事宛に手紙で知らせるよう勧めてくださったご親切を忘れていません。あなたが金沢にお出(1)になってからもう七ヶ月が過ぎてしまいましたのに、その間に嬉しいこと悲しいことたくさんありましたので申訳ありませんが手紙を書く務めを怠ってしまいました。書けなかったのは先ずわたくし自身が病気だったのと、もつともあまり重症ではありませんが、それでも体力が衰え約二ヶ月ぐらひは教室に出られない状態でした。フルトン夫人とヘイズ氏が親切にも手を貸してください、学校はひとまず通常どおりに動いておりました。ネイラー夫人にいちばん負担がかかり、一月には軽い腸チブス(2)になって八週間ほどは起きられず体力も衰えてとても授業の出来る状態ではなかったのですが、来週からは二、三の授業を始められる見込みになりました。このような試練の時に再び神の憐みを豊かにいただく思いをいたしました。クリスマス当日にミス・ショーが着任(3)したのです。彼女のやさしい人柄と援助によってわたくしたちは皆喜びと慰めを受けております。横浜のケルシー先生がクリスマスの休暇に金沢にやって来ました。彼女の治療を受けわたくしの方は大分良くなりましたので、ネイラー夫人の病気中はわたくしが学校を助けることが出来ました。ミツションの皆さんが大変ご親切にあらゆる点で援助してくださいました。授業に関してはフルトン夫人に計り知れないほどの援助を受けました。病気になってはじめて、わたくしにはこんなにくさんの

親切な友人たちがいたのかと気付かせられました。今では全員元気になって再び新たに勇気を取り戻し、わたくしたちになされた憐みに対し天の父に感謝いたしております。

学校についてお知りになりたいでしょうし学校のその後についてお便り出来る喜びにまさることは他にございません。現在学校には収容能力いっぱい五十人の生徒がおり、二十五人が寄宿生、さらに五人が入寮を希望しています。しかしその五人はわたくしたちの部屋を明け渡して使わせない限り受け入れることが出来ないと思いません。お正月の時期に今までの建物は一一杯になり、婦人伝道師養成クラス用として購入した建物も使い始めました。それでもこの二つとも一杯になっていくのですから、次には一体どこへ行ったらよいものか。ミツションの方々がわたくしたちが困っているのを見兼ねて本部にそ

う言って寄宿舎増築の資金を出してもらうより他に仕方がないとの結論を出しました。わたくしたちの学校に大きくてもつと良い建物が必要なのです、とアメリカの教会に訴えられるような手紙を書いたらどんなによいか、それをどんなに願ったことでしょう。わたくしたちの必要がいつまでも満たされなままいる筈がない、と確信しております。わたくしはいくつかの事実を記して、あとはあなたが説明してくださいるのにお任せしましょう。何といつてもあなたにはわたしたちの学校を実際にご覧になったことがありませんし、この大勢の生徒を収容しようとするわたしたちがどんな思いをしているかご想像いただけますでしょうか。

この学校は正式には一八八四年六月に開校(4)し生徒数三十名、敷地とそれにアメリカドル一〇〇〇ドルを要した二人の外国人教師用住宅兼校舎でもって始めました。次の年にはすでにその建物は手狭になり本部に請求して増築の費用四五〇ドルが認められました。こ

の増築の時は必要最少限の工事にとどめたため、結局は大変に寒い居心地のよくない部屋になってしまいました。ウィン夫人が親切にもご援助してくださったものだから、ネイラー夫人とわたくしとでもって小さな部屋をいくつか建増したことが二度ほどございました。この時も可能な限りの少ない費用で建てたのです。このように三人の婦人宣教師の住居を含めて学校の建設に一四五〇ドルをアメリカの教会に出していただいているのです。わたくしたちの願いを、それはお金のむだ遣いだと考える人は誰もいらつしやらないでしょう。わたくしたちはなにもすてきな建物というのではなく、今より広くて暖かい建物がほしいと申しているのです。わたくしたちの計画では、前からある建物はそのまま残し、ちぐはぐな建増し部分を取り壊し、もっと広くてよいものになるような計画に基づいて建て直そうとしているのです。わたくしの病気は大抵頭痛と喉風邪でして、それはきつと暖房が不十分な教室で授業をするせいによるものと思われるのです。教室の仕切りはきわめて薄くしかできていませんから、わたくしたちのいる所と外気の寒さとの間にはごく不十分な壁があるだけなのです。鉄板製のストーブは備えられているものの、教室を暖めようと薪を燃やしても風の強い日には、また金沢の冬は大抵風の吹く日が多いのですが、ほとんど温度が上がらないのです。寄宿生を収容するために九フィート四方の部屋が六室あり、各部屋に生徒二人ずつ入っています。部屋はすべて一杯になり、学校のうちのの日本家屋にも入れております。その建物はわたくしたちの友人が特別に寄附してくださったお金で購入し、婦人伝道師養成の場所として用いる予定でした。でもその仕事はわたくしが病気になつてしまったので始められずいたのでありますが、今では教室がないためにとりかかれません。現在あるものは暗唱教室が三つ、裁縫室がひ

つつあるだけ、そして大抵ハクラス同時に授業を行なっています。市民の方々を迎え行事が行える部屋も、六月には邦語科第一回生を卒業させるのに生徒の父兄すら招くことが出来ません。それがとても残念に思われます。皆さんはいつでも喜んで学校に来てくださるおつもりなのですから。生徒用食堂は12×18フィートの広さでこの部屋でもって二十五人が日に三度食事をするのです。天候のよい期間には生徒たちは前庭で柔軟体操をします。しかし雨や雪が降る時は、金沢はそういう日が多いのですが、生徒は仕方なく運動をすつかり諦めるほかないのです。日本人の生徒はアメリカの生徒にくらべて恵まれておりません。台所とその他の部屋について今述べた場所よりは広いけれども不便である点については何も申しません。わたくしがこう書いているのは不平を言う気持からではなく、わたくしたちの事業に対して為てくださったことすべてに感謝以外の何物も感じていないことをおわかりになつていただけるものと存じます。すべてはあなたのご賛成と援助を得る必要があるため、またわたくしたちがどんなに困つていのかを知ってもらうためにこのようにしていることをわかつていただけるものと思います。もしわたくしたちの要求をお聞き届けくださるのが遅くなるようでしたら、それは皆さんにはそうすることが出来ないのに他ならないものと理解します。しかしこれこそ主の業なのですから、教会はその果すべき務めを理解し日本の地にクリスチャンたちのホームを建設するという恵みの業に与かる特権を悟るように神に祈るものであります。それにしても、教会の人々の助けがこの地方でどんなに必要とされているか、現にここに来て見なければ誰にも十分にはおわかりいただけられないでしょう。

先週日曜日には聖餐式があり四人の方が教会に導き入れられました。



ヘッセル先生の手紙

た。一人はお医者さん、他の一人は初老の男性、もう一人はおばあさんで、ミス・ポーターの幼稚園に通っている小さな孫に導かれキリストを知った方です。最後の一人はかわいいわたくしたちの学校の生徒です。学校にはイエス様を愛し、彼に従っていこうとしている生徒、人々の前に主を告白したいと熱心に望んでいるものの親の反対に会ってそれが出来ない者がもつとたくさんあります。そのような生徒たちのために特にご加禱いただきたいのです。

昨年秋にあなたがお訪ねくださって、楽しく過ごせたのを思いますといつでも元気がわいてきます。楽しい旅をなさったものと思いますがまたいつか近いうちにもう一度お訪ねくださるようお願いしております。ネイラー夫人からも、あなたと奥様に愛をこめてよろしくとのことでした。

メリー・K・ヘッサー

注

(1) この前年九月十五日、外国伝道会社書記、ミツチエル博士が夫人を伴い来沢し四日間滞在、宣教師および日本人クリスチャンに大きな喜びをもたらした。

(2) この年の冬は暖冬、病気の発生が心配される、とウインが記している。ネイラーの看病はヘッサーとウイン夫人がしていたが、折よくケルシー医師が来沢したので彼女の治療を受けた。

(3) 後に最初の外国人校長（一九〇一年四月）に就任したが翌年八月病気のため帰国。四年後の三月六日イリノイ州にて永眠。もの静かな「真にクリスト教徒の生きたる手本」として生徒に接した（戸田忠厚談）と記されている。しかし一方では乗馬もする活発な面もあったらしい。

日本語を若き日の青木澄十郎牧師に教わり、青木はミス・シヨウの人格に深く敬服したという。

(4) 金沢に女学校を作ろうという最初の構想はT・ウインの次の手紙に

見ることができ。」「……もうひとつ私が申し上げたいのは金沢の伝道を助ける若い婦人を派遣してほしいということ。もし送られるならば伝道の経験のある婦人たちでなければなりません。それに適わしい人物が派遣されるなら女学校を作ることが可能になるかと考えます。シカゴ出身の若い婦人が二人金沢での伝道を申出たと聞きました。その人たちが来ればきつと仕事は成功するだろうと思います。しかし繰り返して申しますが、そのような事業を始めるには経験ある人物を指名することがどうしても必要です。」（一八八一年七月二十日、ラウリ博士宛）。

同じく八四年一月七日のウインの手紙には「昨年金沢を訪れていたミス・ヘッサーが女子のための寄宿学校を始めたいと金沢に戻ってきました。この地に五ヶ月間滞在して、これらの女性の間で働く必要性和、これまで手付かずであつて今後も私たちミッションの他には誰れも取り掛かりそうにない広い分野があるのを見てとって彼女の心は人々への愛に燃え、ぜひやってきて人々の地位を高めるために、また救いのために出来ることをしたいと願っているのです」

(5) ピーボディ女史は愛弟子ヘッサーの健康を気づかって、本部宛に次のように援助を訴えている。「……教室の寒さが特にひどく、厚手の肩掛をしないと授業に臨めない。教師たちが病気がちなのはこの寒さのせいである……」。

一八九一年（明治二十四年）

一月十日

金沢にて

ミツチエル博士あて

アメリカからの知らせで、校舎の増改築資金は出せないと聞いてがっかりしました。その時わたくしたちは夏期休暇を札幌で過ごし

ていたのでした。それがみころなのだとはとても辛くて言えませんが、どんなに堪えてみても涙が出てくるのです。というのも、その知らせによって愛するわたくしたちの学校が、主のものであるというしるしがこれほど顕著に見られ主の祝福を受けた学校が、どういふことになるのか予想がつくからです。どんなに困窮しているか、それを知らせるのはわたくしたちの責任であろうと思われるぎりぎりのところまで援助を要請しませんでした。さらにわたくしが手紙を書くのを怠って皆さんに窮状をお知らせしなかつたせいではないかとも思われるのです。しかし人にお金を請うのは誰れにとつても辛いもので、わたくしも延ばしに延ばし、おそらく誰れか他の人がわたくしたちに代わって窮状を訴えてくださるであろうと思つていたからです。というのはわが米長老教会の方々にはわたくしたちがどんなに困難な状況のもとに働いているのか見聞きしたならば、またそのような条件で働くことでもつていかに体力を消耗しているか、もしも分かつていらつしやるならばお願いしたお金を一日たりとも遅らせず送つてくださらない筈はないでしょうに。送金だけでなくもつと自分たちに出来ることは何かないかと尋ねられることでしょうに。わたくしは手紙で余すところなくお伝えできるように筆まめな人が欲しい。わたくしたちの信賴する友人ウィン夫妻がわたくしたちの困つてゐるのを見兼ねて、親切にも禮拜堂と暗唱教室三つを建ててくださいました。わたくしたちは快適な教室が与えられて喜んでおります。主がお二人を祝福されますように。彼は愛の行為とは、また無私の行為とはどんなものであるか知つておられるのです。それは主に対してなされることです。フィシャー夫妻が金沢でのミッシヨン会議に來られ、チャペルに備品を備えるようにと二十五ドル寄付してくださいました。しかしこれだけでは費用を賄えません。ごく

質素な安い備品しか買わなかつたのに、それでも六十ドルしました。この地方には必要欠くべからざる品物、雨戸を窓に取り付けるお金が足りないのです。備品とブラインドのためにわたくしたちが一人五十ドルずつ出しました。それでも今なお必要なのは寄宿生を収容できるような広くてよい施設とわたくしたちの住居の修理費です。現在寄宿生は二十二名、その他にも入りたい者がおります。しかし十名分しか余地がありません。残りの者は雨や雪が吹き込む所へ詰め込まれ、そこに住む者は病気に晒されることとなります。生理学の授業で健康について教えている者が己むなく教えを破らせている訳です。生徒たちがどうしてわたくしたちと一緒にいるのか不思議に思えることがよくあります。大抵の生徒たちはもつと住み心地のよい家の娘たちですし、お金持の家の者もおります。二、三を除いてすべてわたくしたちの助けを必要としません。寮生のために寄宿舎が必要なだけでなく食堂や台所、洗濯場とお風呂場、薪小屋、快適な居間、音楽室がいくつか、それに貯蔵室、押入も必要です。現在の建物にはこれらの施設が足りないか、あるいは有つても小さすぎます。現在は自分たちの部屋を音楽室として使っていますから、もし誰れか来客があれば、それが女性ならば自分の寢室に通すこともできます。男性なら玄関でお会いするしかないのです。でもそれでは控え目によつてもかなり冷淡な扱いになってしまいます。それが雪が四フィートも積もつてゐる今頃の時期に特にそうです。先週開かれた会議では金沢ミッシヨンの全員一致でもう一度本部に女学校のために二五〇〇ドルを請求しようとの決議がなされました。わたくしたちは心の中では人々の心にこのお金を出させる気にならせてください、しかも今すぐにと神に大声で叫びたいほどです。わたくしたちはますます寄宿舎の充実が一番先に叶えられるようにと願つて

## ヘッセル先生の手紙

います。寄宿舎においてこそ生徒たちへの影響力が大きいですから。卒業をして家庭のうち外でいろいろな試練に出合わなければならぬその前に、生徒たちがいくらかでも礼儀をわきまえ、信仰が強められるようにするのが望ましいと思います。寄宿生はほとんど全員がクリスチャンになります。先週の日曜日には一人が受洗をし、他に四人が洗礼を受けようと待っています。それだからこそわたしたちとしては寄宿舎を魅力ある快適なものにしたいのです。現在五十人の通学生が与えられているように寄宿生も五十人は受入れられると思います。世論が反動的になっている中で日本の女学校のうち生徒が減少していない学校などひとつも聞いたことがありません。しかしわたしたちの学校では今までのところ一名も生徒を失わず、逆に入りたいといっている者さえあると聞いています。すでに二人が志願をしております。もしも建物の増築等資金がまたもや遅れるようなことになるなら、わたくしたちの手で少しでも増築するか、もしくは生徒の何人かを手放すかのいずれかになるでしょう。というのは暑い季節にこのように狭い場所に大勢一緒にしておけば病気が発生します。去年の春の学期にはそうでした。かなり多くの寄宿生が病気になったものですから学校を予定より早目に休みにしなければならなかったのです。自分たちの力で増築する方法については今回は経済的にそういう訳にまいりません。交換レポートの問題が大きく響いていまして、そうでなければわたしたちの働きに差し支えが生じるのを見ているくらいならいっそ喜んでわたくしたちがするものを、今回はそういう訳ですからできません。ネイラー夫人と一緒にわたくしが四ヶ所も学校の増築をし、それぞれ五十ドルから八十ドル支払ったなどと公言したくありません。二人が今度またするならばミス・シヨールもそうするでしょう。しかしわたくしたちの給

与は必要なだけしかもらっていない、そこで現在の状況では健康を損なってしまうほど費用を切り詰めてはならないのです。

ミツチェル先生、わたくしがこう申しているのは人々に称賛されたいからではありません。あなたの胸に収めておいていただけなら有難たいです。しかし口に出して言うのがわたくしの務めと思うから、また言ってしまううちは心に平安がありませんから申上げていくのです。そのことを思つて涙を流し、そして祈りました。このようにお願いしているのは自分のためではありません。わたくしは日本の西の地方の若い婦人たちのために考えてほしいと願っているのです。この地域の主の働きのために心からお願ひしているのです。

来週の月曜日の朝から伝道者養成クラスを開始しようと思つています。勉強を始めようとしている若い婦人が六人もおります。この業の上に神が特別に恵みをたれたもうように祈り求めるものであります。

ここ五、六週間、金沢にいる外国人宣教師たちが連日祈禱会を行いました。わたくしたちは心に大きな祝福を受けました。牧師や日本人のクリスチャンたちの心に聖霊が働いているのを知って喜んでおります。教会でももう二週間におよぶ祈禱会が持たれ出席も多いのです。皆が深い関心を示し、クリスチャンでない者たちの間でもわたくしたちの祈禱会に興味を示して尋ねる人もいます。あの人は救いの道を見出したかも知れません。わたくしたちはこれが偉大な信仰復興運動への始まりにすぎず、やがて貴重な魂の豊かな収穫となるように祈つています。すべては神の御栄をあらわすために。

わたくしたちウェスタン女学院の娘たちはなつかしの母、ミス・

ピーボディの訪問を受けました<sup>(3)</sup>。先生がやってきてくださりわたくしたちは本当に嬉しく思いました。そして母親ならでわのやさしい助言と励ましを受けました。彼女はわたくしたちみんなに親切にしてくれました。ケルシー医師が一ヶ月ほど前、居住旅券を得ようと横浜に行きました。ところが横浜にいる間に病気にかかりただちにアメリカに帰国しなくてはならなくなりました。そういう訳で、もう一度わたくしたちは医者のない状態に戻ります。しかし天の父はわたくしたちの必要をすべてご存知でいらつしやるし、わたくしたちもすべてを天の父にお任せすることができません。

わたくしたちは皆元気に喜んで務めに励んでおります。去年いっぱいには授業を休まないつもりでしたが、ここ数年わたくしは軽いカタルを患っております。さき頃ミッシェルの人たちが休暇を取ってアメリカに帰り治療を受けるようにと熱心に勧めてくださいました。日本での勤務は今年で九年目になりますから、新しい宣教師便覧によれば休暇が取れることになっております。帰国するようにとの話に簡単には同意できませんが、もしも今帰国することでもつてのちにもっと良い働きができるというのなら、そして今度戻ってきた時にはもつと長期間勤務が出来るというのなら、ためらうことなくわたくしに課せられた務めであると受けとることにしましょう。しかしわたくしの休暇中誰か学校を助けてくださる方を見つからないとすれば休みを取れる見通しもつかないでしょう。この件につきお尋ねいたします。もし適当な人を見つかったら、この問題についての手紙を書きます。そして金沢のミッションに提案することにいたします。

皆さんがよろしくと申しております。

メリー・K・ヘッサー

## 注

(1) ウィンの手紙(一八九〇年十月二十五日付)には、女学校増築の予算請求が認められなかったのでウィン夫妻の八〇〇ドル(ピーボディの手紙による)の寄付金により階上に暗唱教室三つ、その下に英和学校のとほほ同じ広さの礼拝堂を建てた、と記している。

(2) 「机並に腰掛購入のため金貳拾五円を寄付せられた」(『北陸学院五十年史』)

(3) 「此の月上旬米国老貴婦人ミス・ヘレン・ピーバデー来校せらる。

(中略)爾来オハイヨー州オックスフォード大学校に教授たること三十三年、前後通じて四十年間、孜孜として女子の教育薫陶に尽瘁せられたが、既に高齢に達せしを以て東洋巡回を企てられ我国に來られるや、本校メリー・K・ヘッセル女史其の他の教師等も親しく氏より数年間の教授を受けられし縁故を以て、直に本校に來り滞在せらる。」

(『北陸学院五十年史』)

一八九一年三月八日

金沢にて

ミツチエル博士あて

今年の冬は数ヶ月というもの文字通り雪に閉ざされておりましたが今は雪も溶け始め、あらゆるものの中に新しい命と希望が生まれてきました。わたくし自身も心に新しい希望を感じ、主のために一層よき働きをしたいものと強く望んでおります。主は必ずやわたくしたちの祈りをお聞きくださり、御言葉の種が蒔けるように多くの人々の心をわたくしたちへと開いてくださっています。神の言葉を学ぶ中に多くの興味ある事象を示されたのを耳にしております。フルトン夫妻が数日中に福井での新しい任務へと出発いたします。

## ヘッセル先生の手紙

ご夫妻のために引続き愛をこめて祈ります。二人とも気持のよい人たちでした。また熱心な同労者でしたから、いなくなると大変さびしくなります。福井のためには喜んでおります。そして二人が行くことによつて福井の人々にとっては大きな喜びとなることでしょう。

先週新入生を二人迎え、寮に受入れるという嬉しいことがありました。他にも志願者が三人おります。わたくしたちの隣の小さい日本家屋を借り教師一名生徒数名を収容しました。希望者を受け入れる部屋が用意できましたので六月まではどうにかやってみよう。その後学校が休みに入り次第、新しく寄宿舎の建築に取り掛ければ秋の学期にはすべてをきちんと整えることができるでしょう。建築資金が認められ次第お知らせいただけませんかでしょうか。計画をすべて整え、学校の休暇前に材木を揃えておいてただちに工事に取り掛かれるように手筈をしておこうと思います。学校があるうちに建築するのは大変ですから。通常の予算の時期になるまで知らせがないのでは、わたくしの手元に通知が届くのは七月頃になつてしまいますからそれでは遅すぎます。この前の手紙をきつと受け取つておられるでしょうか、もう一度繰り返して、新しくもつと大きくてよい建物がなくてはならぬ、と申し上げなくてもよいでしょう。あなたがシカゴの四十八号室でお話しなされたのが『インテリア紙』の最近号に載っているのを見て、ご親切な評価のことばにお礼申し上げます。わたくしたちは主のものであるお金を出来る限り節約しようと思つております。それが神様からお預りしたものであると思ふからです。しかしあなたがわたくしたちの努力を評価なさり、あのように十分思いやりを示してくださっているのを知つて大変嬉しいです。

先日ネイラー夫人があなた宛のお便りをなさつたからその手紙で

今年の冬わたくしたちが味わつたいろいろなことをきつとご存知でしょう。だからこれを書けば繰り返しになるかもしれないが、大雪のために小さな教会堂が壊れてしまった後わたくしたちの学校のチャペルを使つて礼拝を守つています。それがちょうど契約の箱がオベデエドの家<sup>(2)</sup>に運び込まれたごとくになりますように。神がわが家を祝福してくださいますように。そうです、もうすでに祝福を受けているのでした。生徒たちが次から次へともつとイエスを知りたいと表明しております。ある者はすでに主の側につくと決心していますし、またほとんど主に向う歩みをするところまできているのですから。このような生徒たちと、彼らを導こうと努めているわたくしたちのために祈りください。

毎週日曜日には十四人の生徒が町のいろいろな所へ出かけて行つて日曜学校を開き、そこで教えています。生徒たちは全部で三〇〇人ほどの子供たちを教えています。その子供たちはわたくしたちの生徒がイエスの感化を受けた姿をみてとつております。まず小さな者へのやさしい気持、それによつて親や友達に対して抱く気持など。たしかに神のなさり方は素晴らしい。神は弱い者を用いて偉大な祝福の業をさせなさいます。神がわたくしのような者をも光榮ある業に預らせてくださることに日々感謝し、主をほめたたえます。ああ、あの方のようになれたら、それがわたくしのかげです。前の手紙でわたくしが留守の間仕事を助けてくださる方が見つかったなら、ミッシェンの申出を受けて一年間休暇を取りたいと書きました。それが出来そうな時間のある人がまだ見つからないので、おそらく今年はアメリカには参りません。来年ならもつと喜んで行けるでしょう。その頃には建築はすべて順調に進んでいるでしょう。半分しか出来ていない学校で、現

在のように教師が三つ別々の建物で生徒を教えるのは大変困難でしょう。二棟の日本家屋の作りは家族が生活するように出来ているのであつて、学校の寮として設計されておりません、現在のように何もかも一緒にしなければならぬ時には、秩序を保とうとしてもほとんど無駄です。どうにもならない状態が外国人教師の神経に大いに障ります。規則のない学校など学校が無いよりもっと悪い。わたくしたちは主の御旨によりすみやかに援助をお送りなさるのを信じ、もうしばらく最善を尽くしてみます。

ネイラー夫人とミス・ショーからもよろしくとのことでした。

メリー・K・ヘッサー

注

(1) 一月二十日午後四時頃、会堂が積雪のため倒壊した。この最初の会堂は石浦町に二二五円で建てられ八四年十一月十六日に献堂式を行ったもの。

(2) 「サムエル記」下、六章十節参照。

一八九一年十一月五日

ロサンゼルス駅にて認む

ミツチエル博士あて

本国に到着してからほぼ二ヶ月、そしてここカリフォルニアにやってくるまで一ヶ月経ちました。最初わたくしは一体どこに居たらいいのか、またどこへ行くべきかさっぱりわかりませんでした。わたくしの病気のカタルが気候によってどんな影響を受けるかを知っている友人の勧めで南カリフォルニアで冬を過ごそうとここにやってきました。

この地に来てから、ここではたえず太陽の光に当たっていられるので痛みが大変楽になり、もうかなり良くなっているように思えます。できる限り早く健康を回復し丈夫になって仕事に復帰したい。わたくしは心から日本に居たくてたまらないのです。

医者に診断をしてもらい治療を受けたのもう楽になっています。医者の話では、今年の冬はカリフォルニアにおいて指示通りにすれば健康になれるというのです。このように病気が癒されるならぜひそうしようと思います。またどんなに苦しくともそれに耐えようと思えます。これまで五、六年というものの病気で苦しんできたのですから、完全に健康を取り戻し、一層主の御栄をあらわせるといいうなら、用いられる手段の上に神の祝福を加えたもうようにと祈ります。眼の治療も必要でして、多少不自由をしていますが一、三日中に眼鏡が新しくなれば前と同じく見えるようになるだろうと思います。

目下、C・M・フィッシャー牧師夫妻のお宅におります。お二人の愛と労りのおかげで、金沢を除いてはほかのどこにもまして憩いの場になっております。宣教師会で五回ほど講演をしましたが、しばらくの間もつと気力がつくまではお話を断わらなくてはなりません。

先日金沢から郵便が届いてわたくしたちのかわいい生徒が三人イエスを主として受入れ、先月第二日曜には洗礼を受けることになっていると、うれしいニュースが届きました。新しい建物はほとんど完成し、ネイラー夫人はこのようなすてきな建物を建てたいとずっと思っていた方にそれがどんなに美しくまた使い易いかお見せしたいと書いてきました。この素晴らしい校舎と、休暇中に工事の大半が出来てしまうように電報を打ってくださったことに対し深く感謝申し上げます。

ヘッセル先生の手紙

学校は十月一日より始まって、いつも通りの数の生徒が集まりました。新入生もありました。今年度は学校は助けられないけれどもその人たちのために祈ることはできます。そしてあの学校の愛する生徒たちが皆今年度の終りまでにキリストに対する決心ができるように祈っています。お便りが遅くなってお許しください。

御名によって

メリー・K・ヘッサー

一八九二年（明治二十五年）

九月二十三日

ミッチェル博士あて

わたくしの休暇の期間は終り、口では言い表わせないほど日本の任務に戻りたくてたまりません。大変に楽しく休養できた一年でした。また嬉しいことにたくさんの方からの友人たちに再会でき、新しく大勢の方々と友だちになりました。ただひとつ残念なのは、わたくしが願っているほどまだ完全に健康を回復していない点です。ふだんの生活ではすっかり丈夫になり、気候が涼しくなっているから急速に体力もついてきたのですがまだ持久力や奪起する力がないので、たとえば人前で話をするような場合疲れ切ってしまうのです。夏にも二、三度講演をしましたが、したいと思っっていることの全部はできませんでした。

ロサンゼルスの主事医の考えでは、もう一度診断を受けるまで日本へ出発する日時をはっきり決めてしまわないほうが良い、ということです。日本へ戻るのを数ヶ月延ばさなくてはならないのなら、東部のこの地よりは南カリフォルニアの気候の温和な所でその期間を過ごした方がよいと考えています。お許をいただいた上で、出来れば

十日ぐらいうちにカリフォルニアに向け出発したいと思いません。

わたくしは、みこころならば十分に健康を取り戻し早く日本に戻ってそこで主のために働かせてください、と日々祈っております。

シカゴには今月二十六日に参りたいと思いますから、わたくしへの手紙は四十八号室宛に送ってくださいれば届きます。ご親切の数々心からお礼申し上げます。

感謝しつつ

メリー・K・ヘッサー

一八九二年十二月二十六日

カリフォルニア州ロサンゼルス市私書箱三九四号

ミッチェル博士あて

わたくしはここに来てからすっかり元気になり体力もついたので、考えていたよりも数週間も早く日本に戻れそうです、とお知らせができて大変嬉しく思っています。

許されるなら、一八九三年二月十四日出航のチャイナ号に乗りたいと思っっています。もし本部として医者の証明書がもう一通いるということでしたらお知らせください、医者に請求しますから。ヘイネス医師は大変慎重な方ですが、わたくしがこのように健康になったのをご覧になれば、迷わずにわたくしに日本の任務に戻ってもよい、とおっしゃってくださいるものと存じます。再び日本でもって主のためにご奉仕できる特権をお与えくださるなら、わたくしはまことに嬉しいです。

至急にお便りをお待ちいたしております。

メリー・K・ヘッサー

F・M・デミック牧師気付

一八九四年（明治二十七年）

一月二十七日

加賀、金沢にて

ギレスピー博士あて

一八九三年（明治二十六年）  
一月十三日  
カリフォルニア州ロサンゼルス市私書箱三九四号  
グラント氏あて

今月四日付の手紙、数日前に拝受いたしました。必要な医者<sup>(1)</sup>の証明書を同封しましたから本部としてもご納得の上、ほどなく任務に戻るご許可をいただきましたいと存じます。今はこのように良くなっているのですから、これ以上はとも留まっています訳にまいりません。できれば来月中旬の船で出発したいと思えますから、この件につき至急にお返事くださるようお願いいたします。

メリー・K・ヘッサー

F・M・デミック牧師気付

注

- (1) ヘッサーの主事医フランシス・L・ヘイネス博士の証明書、「私はここにミス・メリー・K・ヘッサーが健康を回復し、日本での任務に復帰できることを証明します。一八九三年一月十三日、ロサンゼルスにて」

昨年日本での任務に戻った時には、今度休暇願を出す時まで長期にわたりご奉仕ができるものと思っておりましたのに、主のみこころはそうではなかったのです。腫瘍を取り除く手術を受けるためにカリフォルニアに戻らせていただきました、そうしないと体を危うくするので帰国許可をいただきたい、と心痛な思いで本部にお願いしなくてはならなくなりました。

アメリカに在る間に腫瘍が出来ているのを初めて知らされましたが、悪性ではないしふううは急速に大きくなることもないというのでそのために特に危険なことは予想されない、それに優れた医者が二人とも、体全体が健康なら腫瘍のために仕事に差支えることはないと保証してくださいました。

昨年の休暇の間にあのように元気で丈夫になったのだし、生涯を献げた仕事にひたすら戻りたいと願っておりましたものですから、もうあれ以上は留まっておれないと思ひ、日本に戻るよう証明書を書いてください、と主事医にお願いしたのです。医者はわたくしが元気であるとわかると、仕事に就けない理由が見あたらず必要な証明書を出してくださいました。

戻ってまもなく日本の気候のせいでのように病気が一層ひどくなつていくのはわたくしの目にも明らかになり、半年ばかりの間たえず健康が衰え続けました。<sup>(1)</sup>主事医とも手紙で連絡し合ひ、医者はわたくしに戻つてきて必要な治療を受けるようにと強く申します。もしわたくしが続けて日本で働きたいと思うならば、どうしても手



## ヘッセル先生の手紙

術をしなければならぬそうです。医者の手紙を同封します。その方がわたくしが説明するよりも事情をおわかりいただけるでしょう。

それがわたくしに対する主のみどころならば、日本に戻って引き続き主の御用にあたりたいと熱望しております。現在はその半分も仕事が出来ないし、痛みもめつたに止むことがあります。長いこと熱心に祈った上で、それに医者や友人たちの勧めもあつてようやくこの手段を取ろうと決心をいたしました。わたくしとしてはもう一度このようにすぐに休暇を願ひ出なくてはならないので本部にはまことに心苦しいのです。医者はそれが短い期間のことだから、と言つていろいろと励ましてくださいます。わたくしとしては本部からの返事がミツシヨンに届くまで、契約期間内はここに留まりたいと思ひます。できればネイラー姉の戻る六月までは。

わたくしのためになされる多くの方々の熱心な祈りを主が聞こしめしくださるなら、そして健康が回復するならば、主の御栄のためさらに引き続き日本での主の御用にあたれる恵みに与かれるものと存じます。だかもしも手術を受けるのが主の御意志ならば、アメリカで受けるのがわたくしの願ひです。あちらのよい気候のおかげで回復に大いに役立つことでしょうから。

御名により

メリー・K・ヘッサー

## 注

(1) この件につきステイシヨンの代表としてのウインの手紙「・・・ヘッサー女史はほとんど日本に戻ると同時に、明らかに気候のせいで体をひどく悪くし始めているのがわかりました。しかし誰れか金沢の者が、彼女の状態がどのくらい進んでいるのかに気が付くまでに数ヶ月が過

ぎてしまいました。先の休暇でアメリカにいる時に治療を受け、類織維があるとわかったのです。医者は止むなきことは避け腫瘍が大きくなるのは薬でとめられるだろうと考え、その時点では手術で取除こうとしなかったのです。ヘッサー女史はカリフォルニアで、今までよりずっと健康を取り戻したのです。続けて彼の地におれば元気になり体力もついたでしょうに、彼女の思いは金沢にあったのです。体の状態が許すなら生涯を捧げたここでの仕事に戻るのが自分の務めだと感じたのです。医者に相談の結果、彼女の健康は続けて日本にいてもよいと保証され、伝道局も認め必要な診断書を得ました。私が今述べたように女史の体は決して良くないのです。絶えず病状が悪化し、とうとう今ではいつでも痛みのないことはなく、時には激しく痛み、ほとんど外出も出来ないほどです。体の状態からいえば彼女が日本に戻ろうとする前に手術をしなかったのは間違ひでした。しかし戻った後どうなるかは誰にも予想がつかないことです。そのために誰れかを非難する気はありません。ヘッサー女史は主事医と手紙をやりとりし、希望すればいつでも手術をする手筈をして、本人の体の状態が手術に耐えられるだろうとの確信が持てるのを待っています。彼女は伝道局にこのようにすぐもう一度休暇を願ひ出るのに気を使い思ひ悩んでいます。彼女は休暇でないならば辞任をしようと考えています。私たちは皆この件に関して十分考え、休暇を願ひ出るように勧めました」

一八九四年五月二十二日

ギレスピー博士あて

昨日の夕方五時にS・S・ゲリック号で無事アメリカに到着しましたのでお知らせまでと思ひ一筆記しました。船の旅はかつて経験したことの無いほど辛いものでした。しかし途中ずっと主と共にいてくださり、できうる限りの慰めを得られるようにと友人を備え

られました。もう大分元気になって昼には出発しなくてはなりません。南カリフォルニアの目的地に着きましたらもつと詳しくお便りいたします。

メリー・K・ヘッサー

一八九四年八月二十四日

カリフォルニア州ロサンゼルス市私書箱三九四号

ギレスピー博士あて

主事医が病気だったために、またわたくしの体の状態のため手術はこれまで延期されておりました。医者は再び元気になったし、わたくしも丈夫になったので手術日は来週の木曜日か金曜日、八月三十日または三十一日ということになりました。

こちらは天候がきわめて快適で夏中平均気温が七十五パーセントぐらいです。まことによい気候です。愛する天のお父様がすべてこのような恵みをお与えくださったことと深く感謝いたしております。わたくしをもう一度立上らせ、健康と力を与えてくださるのが主のみこころならば、わたくしはそれらすべてを主のために用いたいと思います。御名の栄えのため、わたくしに課せられる苦しみに耐え得る恵みを賜われるように祈ります。生きてはたらく思いやりのことばや多くのクリスチャンの友人から寄せられる祈りに満ちた関心はわたくしにとって大きな慰めとなっております。

わたくしの心は日本の愛する同労者たちと共にあって、これらの働きすべてが益となるよう、また日本の救いのために日々祈っております。この友人にお願いして、自分で手紙が書けるようになるまで時々わたくしの状態を知らせてもらおうようにしてあります。わ

たくしにしてくださったご親切の数々に感謝申し上げます。

注

- (1) ヘッサーはこの手紙を認めた八日後の九月一日に召天している。彼女の死を悼むウインの手紙は「・・・それから、二、三日前に知った大変悲しい知らせについて書きましょう。ヘッサー女史が亡くなって、とうてい埋めつくせない空白が出来てしまいました。伝道局は彼女がこの外国伝道にたいして稀にみる能力と適応性をもっていたのをはたして知っておられたのでしょうか。彼女はその能力をもって主にたいし心からの献身をしていました。私たち一人一人、個人的に感じている悲しみ、またこのステイションの働きにとって大きな損失を思う時、私たちはただ言葉にならず、心の中に痛恨の思いがいたします。『みこころであった』のか。近くヘッサー女史の伝記的素描がある印刷物のために書きます。』(一八九四年十月一日、ジョン・ギレスピー宛の手紙)

- (2) "Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan", Tokyo, 1901 に T・C・ウインの署名入りでヘッサーの死亡記事が載っている。「・・・彼女は強い信念をもった性格で、かつ非凡な才能の持主であった。金沢の地に女学校を創立し、愛とあらゆる労力を注いだ。故国におれば比較的健康に生き長らえたであろうに、日本の娘たちの地位をなんとかしてひき上げようという目的を投げずることが出来なかつた。それゆえ『この手術はあるいはわたくしたちの願っているような結果にはならないかもしれません。でもわたくしはこの身と金沢における事業のすべてを主にお委ねしております』と言って医者へのメスに自分をまかせた……」。